

大学院の2年間で学んだこと

芝本 早織

(授業力高度化コース第4期生)

1. 連合教職大学院との出会い

学部4回生の春、仲間たちが教員採用試験へと向かっていく中で、私は教師になることに大きな不安を感じていた。ボランティアに行ったことがないため、現場のことは全く知らず、教育実習でもうまく授業を展開することが出来なかったからだ。更に私は小学校外国語活動についてもっと学びたいという思いも持っていた。「もっと学ばなくてはいけなかった」と後悔していた時に、この連合教職大学院と出会った。連合教職大学院ならば自分の学びたいことが学べると確信し、入学を決意した。

2. 日々の講義から学んだこと

本大学院では研究者教員と実務家教員とのチーム・ティーチングで進められる講義が多い。コース必修科目「授業における評価の実践と課題」もその一つだ。ここでは以下のようなサイクルで講義が進められた(図1)。研究者教員から評価についての理論を指導していただいた後、実務家教員による現場での実践についての指導がある。それを踏まえて、自分たちならどのように評価基準を定めて評価をするかをグループディスカッションし、指導案を作成した。そして、実際の教育現場ではどうされている

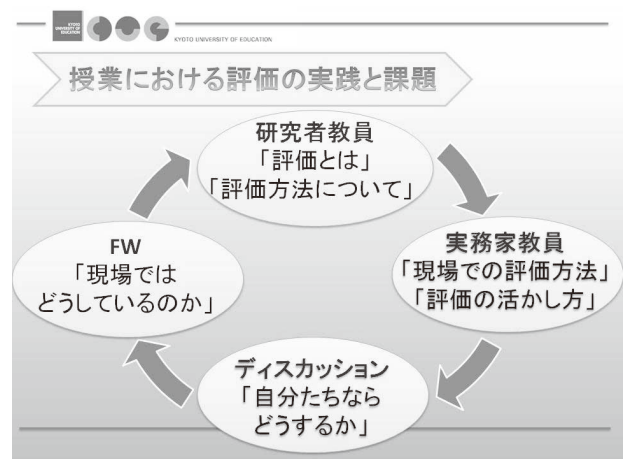


図1 授業のサイクル

のかをFWで実際に見て学ぶのである。大学院へ戻った後はそれぞれで学んだことについてグループディスカッションすることにより、互いの気づきを共有したり、「この場面ではどうしたらいいのだろう」といった更なる疑問に気付いたりできた。

学部時代は評価よりも授業内容を考えること、授業をすることに意識がいきがちであった。しかし、講義を通して評価方法を知ること、評価のことを考えて指導案を作れるようになった。更に評価内容から授業を考える逆向き設計で授業を作り、指導と評価の一体化を意識するようになった。

小学校英語について学び、英語の専門性を高めたいと考えていた私は、大学院での講義と並行して中学校英語科の教員免許状取得を目指し、教育学部の講義も受講した。教育学部の授業では現職の先生とのチーム・ティーチングで模擬授業をしたり、学部生とチームを組んで附属小学校で行う授業を作ったりすることができた。具体的な指導法を学び、教科の専門性を高めることができた。

3. 50 日間の教職専門実習

日々の講義で培った理論を結びつける場が 50 日間の教職専門実習である。

1 回生で行った 15 日間の教職専門実習Ⅰでは、子どもたちとの関係を少しずつ作り、また担任の先生の授業の進め方などを見させていただいた。2 回生で行った 35 日間の教職専門実習Ⅱでは学級開きから担任の先生と共に学級に入り、子どもたちの指導・支援にあたった。教職専門実習Ⅰでは授業づくりと子どもたち個々の指導に目がいきがちであったが、自分が教師になる時が迫ってきていることもあり、学級経営の方法や他学級・学年との連携など、視野を広くして学校現場を見ることができた。

教職専門実習全体を通して、学校と家庭、地域が一つのチームとなって子どもたちを育てている様子を肌で感じることもできた。子どもたちの指導においては、授業づくりに欠かせない児童理解の具体的な手法を教えていただいた。授業を作るときには、その児童理解を活かし、「子どもたちにこうなってほしい」という教師の願いを込めることの大切さも知った。

学部時代の教育実習で、「もっと子どもたちの中にはいっていきなさい、子どもたちに近づいた授業をしなさい」と指導教員に言われたことを思い出す。思い返すと、子どもたちと関わることに戸惑い、積極的になれていない自分がいた。そしていつの間にか教師になる自信を失っていたのだ。しかし、教職専門実習Ⅰでは子どもたちと出会い、毎日小学校に行くのが楽しみになった。毎日少しずつ成長する子どもたちを見て、再度教師になりたいと強く思うようになった。教職専門実習Ⅱでは、自分が最も興味を持っていた外国語活動の授業をさせていただいた。大学院や学部の授業で学んだことを振り返りながら、「外国語を使ったコミュニケーションって楽しい!」と子どもたちに思ってもらえることを目指して授業づくりを行った。その結果、子どもたちに「もう授業終わりなん? もっとやろう!」と言ってもらえた喜びは言葉に変えることが出来ない。授業をしてから子どもたちは私と会うたびに英語であいさつをしてくれるようになり、英語の楽しさを広められたという達成感も感じることもできた。

4. 修了論文

教職専門実習では大学院や教育学部の授業で学んだ理論について実践から学び、自分で実践することができた。そして、肌で感じ学び取った実践を再び理論に架橋するべく修了研究に取り組んだ。

この 2 年間の学びは「外国語活動について学びたい」という思いからスタートしている。その学びをまとめるために、「小学校外国語活動における HRT（担任教諭）の役割に関する研究」というテーマを設定し、研究を進めた。子どもたちの「英語がわからない」という思いをなくし、英語が楽しいと思ってもらえるために、ALT が来校した時の担任教諭の役割について調べ、授業分析を行った。成果としては、これまでの文献で挙げられていた担任教諭の役割を現場の実践を分析することでより具体的な姿に表すことができた。修了論文で得られた結果を現場で活かしていきたいと思う。

5. 2 年間を振り返って

修了をひかえ、この 2 年間を振り返ると入学前と比べて大きく成長したのではないと思う。ボランティアや実習を通して教師になりたいと強く思うようになり、4 月から教壇に立てるという自信をつけること

ができた。英語の専門性を高めることができ、目標としていた中学校英語二種免許状を取得できた。何よりも自分でまずは調べてみる、目の前の事象について立ち止まって考えてみるというようになった。

この2年間学び続けられたのは先生方、そして共に学びあう仲間がいたからである。本当に素敵な仲間たちに巡り合えたと思う。4月からはいよいよ教壇に立つことになる。大学院での貴重な経験と学びを携えて、一生学び続ける教師として歩んでいきたい。